
270分?

駆牙 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

270分？

【Zコード】

Z4353Z

【作者名】

駆牙 蓮

【あらすじ】

オペ室看護師の進藤雅樹シンドウマサキは同僚看護師の成海大和ナルウミヤマへの七年間の片想いがようやく実った。しかし、思う様に関係は変わらず、不安は募っていく。
『270分』の続編です。先にそちらを読まれる事をオススメします。

身体は常に正直だけど、心は簡単に嘘をつく。

俺、進藤雅樹は叶わないと諦めていた七年越しの片想いが実り、幸せの絶頂にいる。・・・筈なんだが。

「じゃあ、俺そろそろ帰るわ」

「何、泊まつてかないの？」

「あー・・・そうしたいんだけど、明日のオペの勉強とかなきゃマズイんだって。悪い」

今日も、ナルは帰つて行つた。元々ただの男同士の友達だつた俺らは、お互いの気持ちを確認した後も仕事以外で会うペースが変わり事はなく、関係だつて何ら変わつてはいない。

まあ、七年間続けていた関係なんて急に変化するもんでもなく、唯一違うのはたまに訪れるきこちない、間。それが照れからなのか、そうある事を望んでいるのか、よく分からない。むしろ、お互い気持ちを確認しただけで、付き合おうとは一言も言つていない。ナルは俺らの関係をどう捉えているのか。悩みはループしていく。

ただ俺は今、非常に欲求不満だ。男つて、そういうモンだろ。好きなヤツが傍にいるんだから当然だと思つ。

「あー・・・さわりてえ」

ナルのいな部屋で一人こぼす。今は原付を持っているナルが自転車しかない俺んちに来ることが多く、泊まるも帰るもナル次第なのだ。

「おはよウ」
「おはよウ」

疲労も重なつてくる週の半ば、水曜日。いつも通りの朝、いつものように手術室の準備をする。

今日一緒に部屋を担当するのは七年目の女性の看護師、長谷さんだ。

「なんか疲れてるねー。隠できてんじやん」「あー・・・なんか寝不足なんすよ」

「あ、杏奈ちゃんにフラれたことを引きずつてるのー?」

俺の悩みなど露知らず、根っから明るいこの先輩は見当違いの空気読めない発言をしてくる。

「違いますよ・・・」

「あつ、そういうえばナルくんが眼科のユカリ先生に迫られてるって知ってる?」

「へつ?!

朝から何て事を言い出すんだ、この人は。

「前からそういう話はあつたけど、最近頻繁に家に誘つたりしてるんだつて。ナルくん、モテるよねー。狙つてる女医が結構いるらしい」

眼科の山下ユカリ。確かに三十路近かつた筈だが、結構美人で男閨係激しいという噂だ。

確かにナルはモテる。それは今に始まつた事ではない。しかし、やはり気にはなる。人の気持ちなど移ろいやすいものだ。もしも、

俺ん家から帰つた後、他の女の所に行つてたら。

「進藤くん?ダイジヨーブ、君もきっといい人現れるつて!」

「はあ・・・どーも」

もちろんナルとの関係は周りに知られてはいけない。これでいい。だけど。

ナルを独占したい。俺を一番に思つて欲しい。

自分が思う強さと同じくらい、相手にも思つて欲しいと思つのは、やっぱりワガママなんだろ?か。

「なー。今日眼科の飲み会に誘われたんだけど、マサも行かねえ？短い昼休み、幸運にもナルと時間が重なった事に喜んでいた俺は、一気にどん底に突き落とされた。

「え、今日は・・・」

今日はナルと新しく出来たお好み焼き屋に行こうと約束していた筈だ。

「なつ、俺一人じゃ行きにくいし、他の看護師誘つていいって言われたし」

・・・今日は、ナルに気持ちを伝えた日からちょうど一ヶ月だ。女の子じゃないんだし、そんな事をいちいち気にするのは自分らしくないと思うけど。だけど、そんな日をナルと過ごせる事を嬉しく思っていたのも事実だった。

「マサ？あんまり気分乗らない？」

しかも眼科。どう考えたって山下ユカリの下心しかねーだろ。悪気なく話すナルにイライラする。

「俺はいいよ。せっかく誘われたんだしナルが行けばいいんじゃね？」

「・・・マサが行かないんだつたら俺も行かない」

ナルが怒られた仔犬の様な顔をする。そんなに行きたかったのか？「行けつて。俺の為に行くの諦めて貰つても別に嬉しくねーしこんなにキツイ言い方をしたい訳じゃないのに。

「ゴメン。でも、今日はマサと晩メシつて

」

「いいよ。メシくらいいつでも食えるし。また今度な。・・・じゃあ午後の準備あるから」

隠した本音が溢れ出しそうで、俺は不自然に席を立つた。何か言いたげなナルを一人残して。

「進藤くん、なんか疲れててる?」

最近頻繁に言われるこのセリフを、午後のオペでも言わせてしまった。心配してくれたのは、皮膚科の美しいお姉様方。

「そーなんですよ。この子、最近杏奈ちゃんにフラれたばかりで「余計な事を言つのはやつぱり長谷さんだ。何でそーゆーハナシを・・・。

「そ、うなんだー可哀想! 進藤くん、いい子なのにね」「ホントだよねー。そ、ういえば痩せたんじやない?」

「マジで?」

「えー、ソライ! 今日の夜、私達イタリアン行くんだけど、進藤くんも来る?」

「へ?!

「よかつたら長谷さんも!」

「いいんですかー! 行きましょ。進藤はいつでもヒマですかー! オイオイオイ! 何を勝手に・・・」

「進藤? 行くわよね?」

長谷さんからフレッシュナーをかけられる。断れねーだろ、この状況。

まあ、いいか。ちょうどナルとの約束が無くなつたとこだし。一人で家で悶々とするよりは気が紛れるだろ。

「いーすよ」

半ばヤケに返事をしてしまった。でもこの時、俺は自分の行動の浅はかさにまだ気付いていなかつた。

「スゲー高そうな店だつたよな・・・」

お姉様方は、俺と長谷さんの分も支払ってくれた。夜景の綺麗な高級イタリアン。

更には、家の前まで高級車で送つてくれた。医者の羽振りの良さ

にはいつも驚かされる。

「ちょっと量は少ないけどなー・・・」

自宅マンションのエレベーターに乗りながら、今日の食事を思い出す。ただ、やっぱりナルとお好み焼きを食べたかった。今頃ナルは眼科のドクターに迫られたりしてんのかな・・・。

切ない気持ちのまま、おもむろに携帯を開くとそこにはナルからの着信履歴が三件。不運にもサイレントモードかよ。

「ヤベ、全然気付かなかつた・・・」

かけ直したいがここはエレベーター。降りてすぐに電話しよう。それから謝りたい。話したい。出来るなら、今日この後にでも会えたら・・・。

「・・・ナル」

一瞬目を疑つた。開いたエレベーターの前に立つのは、紛れも無い、成海大和、その人だつた。

ナルも驚いた顔をしている。俺ん家に来てくれてたのか。そんで今から帰ろうしてたのか？

「どうして・・・眼科の飲み会は・・・」

ナルは俯いた。右手には白いナイロン袋を提げている。

「断つた」

「え？」

「お前とお好み焼きが食べたかったんだけど・・・。これ、要らなかつたら捨てていいから」

言ってナルは手に持つ袋を渡してきた。中にはまだ暖かいお好み焼きが入っている。行きたかつたあの店の、テイクアウトだつた。

「・・・これって。ナル、俺」

「ゴメン、今日は帰る」

ナルは短く会話を切ると、俺が乗ってきたエレベーターに入り、扉を閉めてしまった。

その表情は怒っていると言つても、泣きそうにも見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4353z/>

270分?

2011年12月15日23時47分発行